

## 審査の結果の要旨

氏名 金銀眞

本論はソウルの朝鮮時代からのメインストリートである鍾路およびその周辺の動向に焦点を絞り、都市ソウルの近代化過程を跡づけた研究である。具体的には①開港期から大韓帝国期における近代化のプロセス、②植民地時代の政府と一般市民との関係から抽出される都市空間の存在形態、③鍾路一帯の都市活動と社会集団との関係の3つの側面から分析を試みている。

ソウルの都市史研究はとりわけ1990年代以降急速に発展し、膨大な研究蓄積を築き上げつつあって、本論もまたその潮流のなかの一研究といえるが、多くの点でこれらの諸研究と一線を画する優れた独自性を備えている。以下、各章ごとの概要に触れつつ、本論が到達した研究上の水準について確認する。

論文は本論9章に序と結論が付き、全体としては大きく3部に分かれる。第一部「近代都市へ向かうソウル」では近代化前夜のソウルの鍾路一帯の状況が取り上げられ、依然前近代的な情景を残していたソウルのなかで、とくに中心市街地を形成していた鍾路一帯に徐々に胚胎する近代性の萌芽を丁寧に読み取っている。鍾路は従来の商業空間的な性格に加え、都市民衆が群れ集う祝祭性をもつ消費空間としてモダニティとも呼ぶべき形質を帯びつつあった。

本論の優れた特徴のひとつに当該期の各種新聞記事を中心史料として徹底的に収集・分析している点がある。従来の研究では新聞記事はあくまで補助的な史料として部分的に利用されるに過ぎなかったが、この論文では官報などの公式文書に加えて、当時の社会情勢や市民活動の実態を生き生きと伝える新聞記事を駆使しているところに独自性があるといえてよい。新聞記事はしかし一定の政治思想を反映するので、慎重な史料批判が必要であるが、著者はこの点を十分に意識し、丁寧な史料批判のもとに説得的な論旨で分析を進めている。

第二部「近代都市成立過程における鍾路」では植民地時代中期以降のソウルが取り上げられ、近代化過程そのものが論じられる。このころからソウルではいわゆる都市計画が実施されていくことになるが、朝鮮総督府の都市政策はそのほとんどが道路改修に関わるものであったことが指摘されている。朝鮮市街地計画令と実際の都市計画事業とはほとんど関係がなく、日本における市区改正事業が直接的にソウルの都市計画に反映していたという注目すべき結論を得ている。

都市美観の成立について論じた章では、光化門の移転が都市美観と深く関わっていたこと、都市美観に対する考え方は大きく衛生・清潔観念と低層建築を否定するものがあったという知見を導き出している。これらの指摘は本論がはじめて行ったものであると評価できる。ここにも新聞記事の博搜と徹底した読み込みが功を奏し、都市社会史的な事実解明に成功している。

その他、この部では商業空間の動向にも詳細な検討が加えられ、夜市や街灯の登場による都市活動の終日化、限定された商業空間に過ぎなかった鍾路に近

代的な商業施設が集積・拡大していくプロセス、商人の土地所有の実態などが分析されている。ここでは新たに『商工名録』などの同時代史料が駆使され、商業空間の実態復元が試みられている。

第三部「近代都市の変容」では、主として政治情勢の変化によって、それまで民衆レベルで進行していた近代化に翳りが兆し始める状況を描く。それは一方において朝鮮総督府による「公」的空間の創出過程でもあった。具体的な分析対象として取り上げられるのは、パゴダ公園およびその他の公園、鍾路、景福宮である。

パゴダ公園は鍾路の中心に設けられた近代公園であるが、一般には開放されず1930年ころから徐々に衰退していく。パゴダ公園以外の公園も防空的観点から量産されたのであり、一般民衆のための空間とはいえず、上から与えられた公的空間であったとの結論を得ている。

景福宮では朝鮮総督府始政5年を祝して共進会と称する博覧会が開催された。この博覧会は朝鮮王朝の象徴たる宮殿を解体するものであり、ここにも近代的な公共空間が忍び寄る。かくして、ソウルの近代化は一段落することになる。

以上みてきたように、本論は近代都市成立期のソウルの動向を単にフィジカルな側面だけでなく、都市社会の変化として捉えた力篇であって、多種多様な史料を駆使した論理展開はきわめて説得的である。ここで得られた多くの知見は、既往研究の欠を埋めるばかりでなく、この分野の研究水準を一挙におしあげる成果となって結実した。よって、本論は博士（工学）の学位にふさわしい業績として認められる。